

能覺へて、己がもとへ碁の友來れば、其家内に云合て、菓子盆に焼飯を堆く盛て、茶瓶を添出し置、扱碁にかゝりて他念なき中に、流石空腹になれば、うつし心の中にも、主客ともに彼焼飯をとりて喰ふ、長座に成て其飯盡なんとすれば、勝手心心得て、又能き程に替りを入れ置、飼鳥の餌を入れるに等し、左有て一晝夜打ても飢る事なく、家内の世話も少く、客もあるじへの心置なく、快く碁を樂む也、是に過たる碁の饗應はなし、穴賢碁好に尋常の馳走はせんなき事と知べし、

〔嬉遊笑覽四〕

今碁將碁雙六の三ツの内、碁にはむだ言をいひつゝ、打つこと稀なり、世話盡明曆二年

刻打たる狸のはら鼓御地何ほど蛭の瘡尋、その外少々出せり、其内手みせきんとありて、註に三盤にわたると書たり、今略きて手みきんといふ、廣く賭博に用とかや、續山井花のあとや風の手みきん石の竹、政好手ぞみたき風にみだれ碁石の竹、山石

〔本因坊家略紀下〕三代目本因坊道悅 出生石見

道悅時分より袈裟を取り、衣の袖も短く成る事は、筭知と二十番のせり合の時分より也、御城にて碁仕候節、又は上覽之節、手を突候故、袈裟衣盤の上へ障り、上覽之節、御目通りに候へば、石を直し候も仕にく、第一相手も兎や角と申、碁の障になり、殊に負候得者、遠島の御請申上候故、大切之碁に候へば、心障候ては仕にく、御座候間、向後袈裟を取衣の袖も短く仕度奉存候由御届申上候、尤之由被仰候、此時分、より衣も短く、袈裟も取申候、

〔男重寶記三〕碁指南會所

一京四條通室町東へ入ル町

〔翁草百七十四〕塵塚の塵

寶曆の頃、岡和仙初段の碁也、四條道場内の空坊にて碁屋をはじめける時、或人、

碁屋ならば寄大炊など、有べきををかわせんとは御手違ひ哉